とったカルタを得意そうにあげる園児

保育園でカルタ大会

一位、二位にパーマンのメダル

一月は、村内各保育園で、カルタ大会が開かれました。

中央保育園では十二日、ばら組のカルタ大会が広い遊戯室で、五〇人の園児たちが五人ずつに分かれ一斉に行われ楽しんでいました。

みんな手を頭にのせ、保母さんの読みあげるカルタを真剣に聞きいる。

「ほうせききらきら、きれいになったしんでれら」と読みあげられると〝ハイッ〟と大きな声を出してカルタをとり、とったカルタを得意そうにもって手を上げる。

カルタは、シンデレラや、三匹の子豚、親ゆび姫、みにくいあひるの子など世界の昔し話。みんな知っているのか読みあげられると、すばやく〝ハイッ〟と元気よくとる。一人で一八枚もとった園児もいました。

各グループで一位、二位になった園児たちには、保母さんが紙で作ったテレビマンガの人気者、パーマンのメダルを一人一人の首にさげてやりました。

＜この人を訪ねて＞

ボケ止めで竹細工を

県新作竹籐コンクールに見事入賞

駒込　志田清一郎さん（60歳）

昨年十月に行われた新潟県新作家具漆器、竹籐製品コンクールに竹製衝立を出品、名人といわれる職人を前にして見事に入賞した志田清一郎さん。「ボケ止めで竹細工をはじめたんですよ。まさか入賞できるとはね」と喜びを語る。

志田さんと竹工芸の出合いは、昭和五十五年からはじめた藤駒地区村づくり事業で地元で沢山生えているもう宗竹の利用方法がないかと論議、婦人たちは、たけのこの本格的生産と出荷、それに保存食品としてのびん詰加工、お年寄りたちは、竹細工をすることになっという。

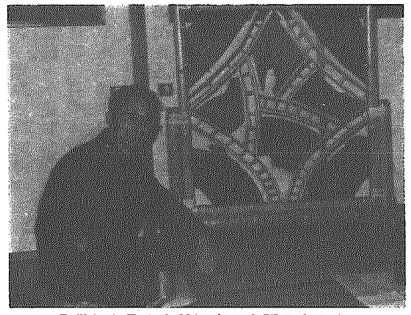
「私は、まだ若かったが、老人クラブの竹工芸クラブに願い出て入れてもらったんですよ。」竹工芸クラブの人たちは、年に十回ほど県工業技術センターの先生を招き、指導をうけ、個々で暇を見つけて思い思いの製作に余念がない。

志田さんの玄関前と庭にはさまざまな袖垣が立てられている。「こうして並べておくと、技術の進歩がよくわかりますね。去年は袖垣が五つほど注文があって作ってやりました。一つ五万から七万円位でしょうかね。」結構お金もかかり、材料選びが大変とか。

袖垣に使うランマ板や、丸太、杉皮などは山形県から仕入れたり、生筒は自分の竹林を利用するところから自分の竹林では間に合わず、附近の竹林で気に入った幹や根元をさがし譲りうけているという。

「今は皆さん思い思いの作品の製作にとり組んでいますが、お互いに訪ね合い、一杯のみながら批評し合うことが何よりも楽しいですね。おかげで、だまり虫で、人にもあいさつしなかった私が、人に声をかけるようになったりして人生観が変わりましたよ」と話す。

「ともかく、ボケ止めで始めた竹工芸、暇つぶしと手足を動かすこと仲間と話し合うことが何より」と、これまで作った竹細工を持ち出し、一つ一つ苦労話しを話してくれました。



入賞した衝立を前に喜びを語る志田さん

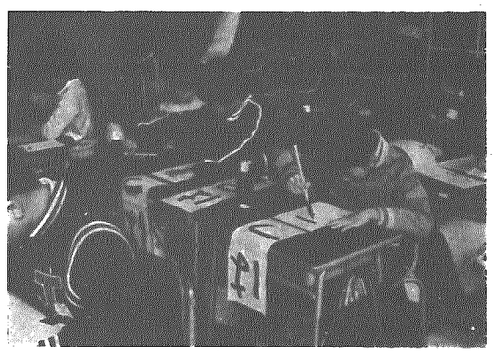
小学校では書初め大会

父兄からも観てもらう

横越小学校では、三年生以上の書初め大会が一月十三日一時限と二時限に一斉に行われました。

四年生のある教室では、「はつ春」の書初め。先生から「筆先は、三分の二くらいまでつぶして、大きく太く書くこと。〝春〟という字が大きくなりがち、春の〝三〟の間があきすぎのため。〝つ〟は逆に小さくなりがち」と注意され、真剣に筆を運ぶ。

こうして書かれた書初めは十七日から二十三日まで体育館に展示され、十九日の参観日に父兄からも観てもらいました。



心を新らたにして真剣に筆を運ぶ

有放新番組に

作文と童話

昭和五十九年度の有線放送自主番組実施計画がこのほどまとまりました。年間の放送日数は三一四回、従来通り日曜日を除いて毎日朝と夜（再放送）放送されます。

今年度新しく企画された番組は、小学生を対象にした「作文の時間」、幼児も聴いて楽しい「童話」があります。

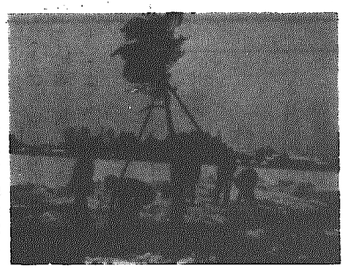
テレホンガイドは、従来通り、農作業メモと生活メモを毎月三回内容を替えて放送があり、農作業メモは、有線電話ダイヤル6、生活メモはダイヤル7を回わせば放送を聴くことができます。

有線放送協会では、暮しにすぐ役立つ情報、楽しい番組づくりに努めています。皆さんのご意見をお寄せくださいとのこと。

小正月にサイの神

青少年の健全育成願う

白煙をあげて燃え上がるサイの神（横越下地区）



北蒲安田町から取り寄せたという竹四本を結びヤマづくり

昨秋、この日のために稲ワラ二〇アール分を確保、ワラが積上げられサイの神が次第にできあがる

小正月の十五日、横越下、木津、小杉地区でサイの神行事が行われました。（二本木地区は十四日）

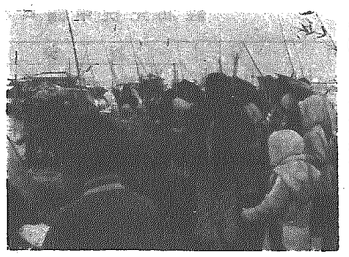
横越下地区では、青少年育成村民会議の役員の人たち十数人で冷い雨の降る中、駒込農道わきで午前九時からサイの神づくり。

太いもう宗竹四本でヤマを組み、中心には数本の竹とマメギを入れ、回わりを稲ワラで積み上げていき、二時間ほどかかってできました。

午前十一時半、小学生や地域の人たち一五〇人ほどが見守るなか、小学校六年生の代表が近くの神社からランプで運んできた御神火をたいまつに移し、サイの神に火がつけられました。

火は白煙を巻きながら勢いよく炎えあがり、時折「バーン」「バーン」と竹が割れる音に大きな歓声が湧く。

竹ざおにつるしたスルメやモチを火にかざし、ほおばりながら無病息災、学業成就、青少年の健全育成を願っていました。このあと、地区の集会場でモチツキ大会と映写会で小正月行事を楽しんでいました。



スルメをつるした竹ざおを手にし、点火を待つ

スルメ、モチをつるす竹ざおづくり、役員はいたれりつくせりの配慮

お年寄りと心の健康 No.7

心気症

〝病気〟で家族の愛情求める

一般的にお年寄りは、自分の身体の機能や健康状態を気にするようになります。

健康にとらわれすぎは心の病気

しかし、自分の健康状態の過度のとらわれや不安のある状態は、一種の心の病気といってよく、医学的に〝心気症〟といわれます。

例えば「頭痛がする」「耳鳴りがする」「肩がこる」「胃腸の具合が悪い」「便秘がちだ」「よく眠れない」など少しでも具合が悪いと、盛んに周囲の人に訴えるお年寄りがそうです。

〝病気〟で周囲の関心を買う

どうして老年期に、こうした心気症が多いかといいますと、一つには、病気への逃避という防衛本能によるものと考えられます。

私たちの社会は、病気した人間には、回復を目的とした保護の手が差し伸べられるのが普通です。「疾病利得」という言葉もありますが、家族や周囲からあまりかまってもらえないお年寄りは、病気で関心を買おうとするものです。

そして、もう一つの要因として考えられるのは、老年期になると、精神的な興味が外に向かって開かれることが少なくなり、その反動として心気症が起こりやすいと考えられます。そのため、若いころには身体のことなど気にしなかった人が、異常なほど関心をもつようになるのです。

病気の訴えはめんどうがらずに聞く

この心気症の特徴は、訴え自体に深刻味が少なく、死の恐怖とは、直接的関連が少ないということです。主として身体的快感や満足感を脅かす頭の重い感じ、耳鳴り、便通などに代表されます。

とりわけ、お年寄りが気にするのは便通の状態ですこれは病気に対する恐怖のほかに排泄そのものへの一種の自己愛（身体愛）の表現とも考えられます。身体的機能がだんだん衰えていく不安におびえるお年寄りは、家族の血の通った愛情を求めているのです。